

原著論文

中国における中国人日本語教師のライフヒストリー研究

— コーホートによる授業スタイル形成の相違に着目して —

康 鳳麗¹⁾, 森脇 健夫²⁾, 坂本 勝信³⁾

1) 鈴鹿医療科学大学, 2) 三重大学, 3) 浜松大学

キーワード: コーホート, ライフヒストリー, 中国人日本語教師, 教師のライフコース, キャリアアップ

要 旨

本稿は、中国人日本語教師の就職コーホート性を明らかにし、個々のライフヒストリーが展開する舞台や条件を明らかにすることを目的とした。中国の高等教育機関における日本語教育の制度的歴史、また、日本語教育をめぐる社会的文化的背景を基に、1980年代から現在に至る第一コーホートから第四コーホートを析出した。そして、天津と西安の15人の大学に勤める日本語教師のライフヒストリーをそこに位置づけるという作業を行った。その結果、天津と西安の地域性よりも世代コーホート性の方が強く個々のライフヒストリーに影響していることが判明した。

各々の世代において「教える」ことについて、共通の時代的な課題（例えば日本語をめぐる情報環境の変化や学習者である学生の変化）が存在し、また「悩み」も共通する。中国における日本語教育の大きな課題として、まず、若い日本語教師が「教える」という仕事と自らのキャリアアップを同時に行っていかなければならないこと、次に、熟練教師が培ってきた日本語教育についての「教える」専門性をどう継承すればよいのか、といった点が挙げられる。

はじめに

中華人民共和国成立（1949年）後における日本語教育の歴史及び時代の特徴は以下の通りである（国際交流基金 2009 年調査¹⁾、篠崎 2003²⁾、篠崎・曹 2006³⁾）。1972 年の日中国交正常化は（1949 年新中国設立後の）第 1 次日本語ブームをもたらし、多くの大学で日本語教育が開始された。この時期の日本語教師の特徴として竹中（1988）⁴⁾ は、（日本からの帰国者等の場合は）一般的に運用力が高く、日本人の思考、風習習慣まで理解できるが、外国語としての日本語教育という意識が不足していること、（新中国成立後の大学で教育を受けた者の場合は）十分な教育を受けておらず教師としての経験も不足していることを挙げている。1980 年に当時の大平首相の提唱を受ける形で日中両国間政府の合意に基づく「在中国日本語研修センター」（通称「大平学校」）が設立され、大学日本語教師の再教育が実施された。「大平学校」での研修は「日本語運用力の向上」ならびに、「言語理論と各専門領域の知識の向上」に重点が置かれ、文化大革命中に採用された現職教師の再研修を一斉に行うことが目標とされた。

1980 年代から中等教育、高等教育での日本語教育シラバス整備が始められ、1980 年代半ばには第 2 次日本語ブームが訪れた。そして上記「大平学校」が 1985 年より発展的解消する形で「北京日本学術センター」が設立された。「北京日本学術センター」では、日本語教師の再教育と大学院修士課程の学生の教育を平行して実施するようになり「日本に関する専門知識を有する『高級日本語教師』を超えた高レベルな『日本研究者』の養成」が目標となった（篠崎・曹 2006）⁵⁾。

1990 年代には、各教育段階でのシラバス整備の結果を受けて、それに準拠した教科書が次々に出版され、日本語は、英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。この時期の教師研修ニーズについて、国際交流基金日本語国際センターが実施する非母語話者教師教育に関する報告によると、1994 年－97 年中国からの教師参加者から「日本に関する知識、教授能力と教授技術、日本語能力（聞く・話す）」が希望されたという（木谷・

坪山 2000）⁶⁾。日本語に接する機会が十分でなかった証左だろう。

2000 年代に入ってから初等・中等教育機関での学習者数が減少し、高等教育機関や学校教育以外の機関での学習者、第二外国語として日本語を履修する学生が増えた。インターネットの普及等により日本の情報が入手しやすくなり、また学習者の変容も急速に進んでいる時代に入り、学習者のニーズの変化、またそれによる教師への要求が無視できないところに至っている。

私たちはこれまで、日本語教師の授業スタイルがどのように形成されたかをライフヒストリーインタビューを用いて明らかにする、という個別研究を重ねてきた（康、森脇、坂本 2007⁷⁾、2008⁸⁾、2010⁹⁾、森脇、康、坂本 2011¹⁰⁾、2012¹¹⁾）。サンプリングとしては、「サンプル内の多様性を最大にする」（Patton 1990）¹²⁾ ように配慮し、条件の異なる教育環境の中で授業スタイルの形成が行われているかを明らかにしてきた。また、中国人日本語教師の個別研究も行った（康、森脇、坂本 2008、森脇、康、坂本 2012）。中国国内における事例研究は、天津市と西安市のいくつかの大学において行ってきた。天津市と西安市は、それぞれ沿海部と内陸部の大都市ではあるが、地域的条件が大きく異なっている。すなわち、日本の資本がかなり入ってきている沿海部地域と、観光地ではあるが日本資本の影響をそれほど受けていない内陸部地域、という対照性がある。こうした地域性は、学習者である学生の将来展望と大きく関わっている。最近の日中関係の政治的関係の冷え込みは、より西安において学生の将来展望に暗い影を投げかけている。

しかしながら、15 名（天津 9 名、西安 6 名）に及ぶ中国人日本語教師に個別的なインタビューを行ってきて、地域の違いよりもむしろ世代の違いによる日本語教師としての経験が大きな影響を与えていることにも気づかされた。中国の社会変革、文教政策の変化、モノから人、そしてお金、情報の行き来の増加等、その大きな流れの中に日本語教師としての経験が位置づけられるのである。

本稿での課題は、中国人日本語教師について、これまで収集してきた個々のライフヒストリーデータを改めて

社会・歴史上のより大きな流れの中で具体的に位置づけることである。概念装置としては、個々の教師のライフコースをコーホートによって捉える。このことによって個々の中国人日本語教師の経験の舞台が明らかになるであろうし、個々の日本語教師が抱える課題や問題状況についても理解が深まるだろう。ここで、ライフコース、コーホート、ライフヒストリーの概念整理をしておく。

歴史的・社会的文脈の中での諸個人の生涯展開を捉えようとする包括概念は「ライフコース (life-course)」である。山崎 (2002)¹³⁾ は、「ライフコース (life-course)」とは「年齢によって区分された生涯期間 (life span) を通じてのいくつかの軌跡 (pathways), すなわち人生上の出来事 (events) についての時機調節 (timing), 移行期間 (duration), 間隔 (spacing) 及び順序 (order) に見られる社会的なパターン」(p13) であり、「変容性」「多様性」「コーホート (cohort) 性」「歴史性」の4つの性格を持つと述べた。コーホートとは、「共通の出来事を同時代に経験した人々の集団」と定義され、一般には「出生コーホート」「卒業コーホート」「就職コーホート」などが用いられる (p74 注5)。教師のライフコースは、同一コーホート内に多様性を含みながら、他のコーホートと比較して見た時、それぞれのコーホート固有の特徴を有するというコーホート性を帯びているとしていると主張した (p15)。山崎 (2002) では、(S 大学教育学部卒業生を対象に 1984 年 8 月 1,506 名, 1989 年 8 月 1,253 名, 1994 年 8 月 1,437 名の3回にわたって行なった) 質問紙調査結果のデータをもとに統計的量的分析を行い、ライフコースにおける「コーホート性」と集団レベルでの「変容性」「歴史性」を明らかにした。と同時に、量的データの各コーホートから計 22 名の事例分析対象者を抽出しインタビュー調査を行った。インタビュー調査結果のデータをもとに事例的質的分析を行った。教師として歩んできた軌跡をライフステージとして、個人時間 (加齢・成熟) と社会時間 (家族や職業などの周期) と歴史時間 (時代) という3つの時間に束ねて描き出し、一人ひとりのライフコースとその時期ごとの固有な、あるいは共通な特徴を生み出していること、いわゆる、ライフコースにおける

「多様性」と個人レベルでの「変容性」「歴史性」を明らかにした。

一人ひとりの人間の発達や歩んできた軌跡にこだわることによって、それをもたらした背景にある文化や歴史を逆照射しようとする研究に、文化人類学や歴史学の領域において用いられてきたライフヒストリー (life-history) 研究がある。

ライフコースとライフヒストリーの関係について (藤原 2013)¹⁴⁾ は、次のように述べた。「ライフコース」は「諸個人の生涯展開」という点から典型的にはコーホートを対象化しつつ、そこにおける「多様な傾向性や規則性の認識」の所産と言える。教師のライフコースであれば、例えばある世代の教師たちにとって、初任期に必要な力量形成の契機は何であったのかという問いが視野に入ってくると述べる。それに対して、ライフヒストリーでは、特定の個人が経験した出来事の繋がりが対象化される。したがって、教師のライフヒストリーとは、特定の教師が個別的な実践状況の中で様々な出来事を経験しつつ、教師としての自己を形成していった軌跡を描き出すものである。

そこで本研究は、ライフコース (の中のコーホート) 研究 (山崎 2002) に倣い、筆者らがこれまでのライフヒストリー的アプローチ研究をいかし、1949 年新中国設立後から 21 世紀現在に至るまでそれぞれの時期において、中国人日本語教師はどのような力量が求められてきたか、そして、そういった時代的な制約と条件の中で教師としてどのような力量形成が行われたのか、を個々の教師の日本語教師としての力量形成のあり方を明らかにする中で浮き彫りにしたい。さらにそのことは、地域が違っていても世代的同一性、いわゆる、コーホート性があるかどうか、個性的な力量形成と時代的な背景を結びつける試みをしたい。

【対象, 方法】

研究方法としてはまず中国における就職コーホート (日本語教師になった時期) にしたがって 4 つの時期に

分ける。1980年代（1980年～89年）を第一コーホート、1990年代（1990年～99年）を第二コーホート、2000年代（2000年～2009年）を第三コーホート、2010年代（2010年～）を第四コーホートとする。15名の教師は第一コーホート6名、第三コーホート7名、第四コーホート2名である。

まず、それぞれのコーホートの特徴（社会的歴史的背景、制度とキャリアアップ、学習者の特徴）を挙げる。その上で、特に第一コーホートと第三コーホートをとりあげる。それはこの二つのコーホートに属する日本語教師が大半であることと同時に、ちょうど第三コーホートの日本語教師は第一コーホートの世代に学び日本語教師になったという経緯があるからである。またいろいろな意味で対照性を持つことが予想されるからである。そして個々のライフヒストリーをつなぎあわせていく作業をする。その際、第一コーホートの事例としてA（西安）とD（天津）、また第三コーホートの事例としてJ（西安）とL（天津）をとりあげる。

I 中国における日本語教育の歴史及び研究対象コーホート

図1は15名の研究対象コーホートのライフコースの平均的ステップをその時代背景とともに描いたものである。それぞれが教職に就くまでの時期に対応させて特徴づけて表1で示す。

1972年日中国交正常化により中国国内では日本語ブームが起き、多くの大学で日本語教育が始まった。そのブームがきっかけで第一コーホートの教師たちは大学を卒業してからすぐに日本語教師になった。いわゆる、学士学位の教師である。しかし、この時期は本稿「はじめに」で述べたように全体的に大学教員としての研究能力が不足しているため、中国人現職日本語教師向けの研修を目的とする「大平学校」が設立された。本研究の対象者であるA教師は「大平学校」で、E教師は「大平学校」が発展的解消する形で設立された「北京日本学研究所」で研修していた。その研修経験はA教師、E教師の授業への影響について次章の事例分析にてA教師を取り上げて述べることにする。その後

1980年代半ばに入っても日本語ブームは衰えを見せず、初等教育・高等教育での日本語シラバスが整備され、日本語はやがて英語に次ぐ第2の外国語の地位を確立した。そして、上記第一コーホートの6人の教師はほぼ全員それぞれ初任期において様々な形で日本経験を果たした。そのうち、E教師は日本滞在が8年間と最も長く、教育学博士を取得して帰国した。

一方、第三コーホートの7名の教師は全員1990年代後半に中国国内で大学・大学院修士課程を経て2000年代半ばから日本語教師になった人たちである。この時期は中国国内の高学歴化が進み、大学で日本語教師になるのには博士学位が重要視されるようになった。その原因について秦明吾（2007）¹⁵⁾は次のように述べている。一流大学の日本語学科教員が飽和状態になる一方で、日本や中国の大学で博士学位の取得者が増加している。また学習者ニーズもサブカルチャーへの興味関心や日本の情報の入手しやすさなどにより急速に高度化、多様化した。この時代的变化に応じて、新採教師に対

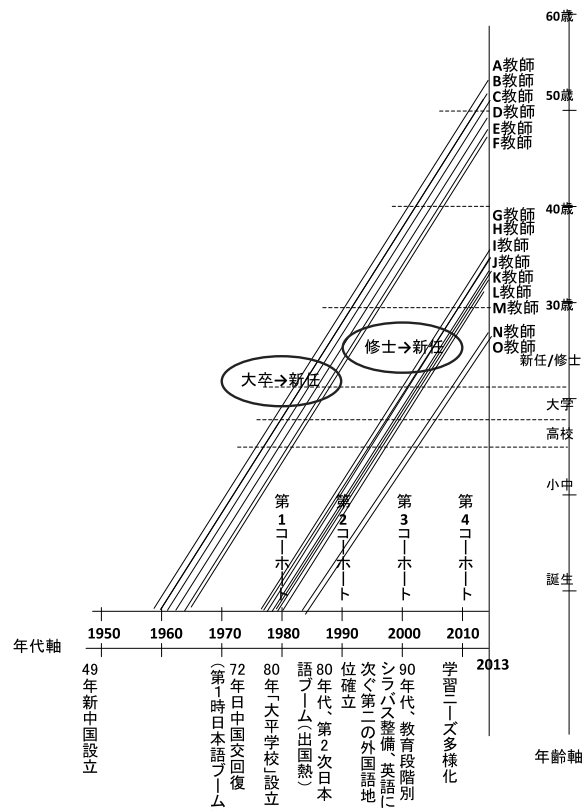


図1 研究対象者コーホート，そのライフコースの平均的ステップ

表1 研究対象者である各コーホートの時代背景

就職コーホート 事項	第1コーホート (1980-89)	第2コーホート (1990-99)	第3コーホート (2000-09)	第4コーホート (2010-)
日本語教師になった年	A教師(1982年) B教師(1984年) C教師(1985年) D教師(1981年/中学校、1989年/大学) E教師(1983年) F教師(1985年)		G教師(2007年) H教師(2004年) I教師(2004年) J教師(2005年) K教師(2005年) L教師(2005年) M教師(2006年)	N教師(2010年) O教師(2011年)
社会的背景	1972年日中国交正常化により第1次日本語ブームが起き、多くの大学で日本語教育が始まった。1980年に「大平学校」、1985年に「大平学校」が発展的解消する形で「北京日本学研究中心」が設立した。	中等教育、高等教育での日本語教育シラバスが整備された。日本語は英語に次ぐ第2の外国語の地位を確立した。	主な大学の日本語学科で学生の拡大募集が行われるようになった。クラス規模は、今まで1学年2クラス×20人前後から、30人前後×10クラス以上になった。学習ニーズの多様化、及び教師への要求の変化。インターネットの普及等により日本語へのアクセス環境の変化。	日中関係の政治的関係の冷え込み。
教材(教科書)	各大学のプリント教材と『新編日語』の前版	80年代初中等教科書編集 90年代非専攻用教科書編集(『標準日本語』)	多数の新版新規教科書 『総合日語』北京大学出版社2007、 『新編日語』上海外国語教育出版社2009、 新シリーズ『基礎日語総合教程』全12冊高等教育出版社2010	
教材に見られる人材養成目標	日本語で中国の政治志向を主張する日本人を接待するときに正確な日本語ができる	正確な日本語ができる 日本についてある程度知識を持つ 円滑なコミュニケーションができる 日本社会、文化が理解できる	正しい日本語・日本文化・日本人の心を得て・理解する 正しい日本語と日本文化への理解によりコミュニケーション能力向上を図る 協働学習を通して課題解決する	

して、文法・文学・教授法のみではなく、日本の歴史や社会に対する知識の幅広さを求めるようになった。さらに、各大学の日本語教師は女性教師が圧倒的に多い現状へ性別調整を行っていることにより、男性で博士学位を有する者が就職しやすいという。このような教師への要求の変化に危機感を抱く証のように、本稿次章で取り上げるJ教師は中国国内で在職しながら博士学位を取得した。E教師は大学の学位取得奨励制度を利用して4年間かけて日本で博士の学位を取得した。ほかに、G教師は博士号を日本にて取得して、H教師・I教師は日本で、K教師は中国国内で博士課程在学中である。また、M教師は博士課程に進学できなかったことに悩みを抱え、第四コーホートのN教師とO教師も博士課程に進学することを考えているという。

II 事例分析：各コーホートの日本語教師のライフヒストリーインタビューから

15人の中国人日本語教師から第一コーホート及び、第三コーホートに所属する四人の日本語教師の事例分析を行う。地域性を加味して、第一コーホート・第三コーホートとも、天津・西安から一人ずつ事例として取り上げる。事例分析においては、プロフィール、授業スタイル及び、その形成過程、現在の課題について取り

上げ、要約して述べる^(註1)。

II-1 第一コーホート A教師の事例(西安)

A教師(女性・1959年生まれ・教師歴31年)のプロフィールを簡単に紹介しておく。

A教師は、1978年西安A大学に進学し、日本語を学び始めた。1982年A大学日本語専攻卒業後、同大学で教員として採用され、日本語教師になった。教師になって3年目の1984年に大平学校で年間研修の機会を得た。研修期間中一ヶ月の日本研修旅行で初来日した。その後、1985年から2年間、日本のG大学での留学を経て1987年中国帰国し、現在に至る。

A教師は授業で、文法を丁寧に教えている。教科書を教えるときは決まり文句や助詞との組み合わせも一緒に教えるなど工夫している。また、音読み練習を重視していて、授業中はできるだけ日本語を使うようにして教室での日本語環境を作るようにしている。ほかに、学生に授業時間外にインターネットで色々なドラマやドキュメンタリーをいかすように勧めている。

この授業スタイルの由来は、自らの学習経験から来たものだという。A教師は日本語専攻の第1期生であった。当時の学科では教員は日本人教師と日本から帰国した

華僑教師だった。その教員たちは日本語が流暢だが、文法の説明ができなかった。学生たちは繰り返し読まれ暗誦させられて、一年間、全く文法について教えられなかった。そのような学習を通して、「聴解」の授業がなくても生の日本語が分かるようになった。しかし、文法が分からないのが教員になった時の苦労のもととなった。A 教師が日本語教師になった当時の現場は、教員同士のチームワークがなく、教材も統一されていなかった。初任の頃、一番難しかったのは文法を教えることだった。文法が分からない。日本語の教え方も分からない。独学で文法を学んで、教えていた。授業のない午後は若い教師が集まって研修会をしたり、日本人の先生に教えてもらったりして勉強したという。

教えることに困難を感じていた初任期の A 教師に転機をもたらしたきっかけは、日本語教師になって3年目の1984年に経験した大平学校での研修であった。研修期間中の1ヶ月間日本研修旅行で初来日を果たし、その後2年間日本のG大学に留学し、1987年中国へ帰国した。留学から帰ってきて日本語が話せるようになり、自信を持って教えられるようになったという。自らの学習経験、留学経験を通して、文法の大切さ、日本語環境の大切さを感じたという。

30年間日本語教育に携わってきたA教師の今の悩みは、学生の就職難だという。かつては就職率95%を誇る全学一位の日本語学科だったが、現在、就職難に直面している。日本語ブーム到来の勢いで学科規模を拡大した当時は良かったが、政治問題に左右され、インタビューを行った2012年は特に大変だと指摘していた。4年間日本語を習ってきたのに、使うところがない。学生たちが将来の展望を失い、学習意欲がなくなってしまっているとのことだった。

II-2 第一コーホート D教師の事例（天津）

D 教師（女性・1962年生まれ・教師歴26年）のプロフィールを簡単に紹介しておく。

D 教師は1978年2月から3年間、天津B大学附属学校で日本語を学んだあと、中学校で日本語教師に

なった。2年弱勤めて学歴を取得するため、1982年、B大学に入学した。4年間大学と3年間同大学大学院を経て1989年大学院修士課程修了後、B大学日本語学部で専任教師として就職して現在に至る。在職中の1991年はKN大学、1999年はKG大学、2004年はM大学にてそれぞれ1年間ずつ日本語研修と中国語講師として来日経験を持つ。

D 教師は教科書を教えるとき学生が印象に残りやすい、記憶しやすいように色々な工夫をしている。学生をつぶやきをキャッチして即時に対応している。また、個別の学生への対応を、瞬時に判断して、間違いの訂正や日本の自然や文化に関するエピソード紹介につなぎ、さらにそれを全体への対応に変えていくようにしている。

在学中、日本語教授法を学んだことのないD教師は今、自分の学生としての学習経験、教師としての教授経験をいかして授業をしているという。連用形の作り方や撥音変、促音変等々、教えてみて初めて分かったことがたくさんあり、現在は授業を分かりやすく、面白くすることができるようになった。また、「聞く」「話す」「読む」「書く」「訳す」の五技能の訓練をバランスよくするように心掛けていているという。この授業スタイルの形成過程についてD教師は「自然形成」という言葉を使って表現した。学生時代の先生、同僚、そして、自分の失敗、さらに教え子の学習経験から学びながら、さまざまな「できごと」との出会いを通して、自分の授業スタイルを作り上げてきた。D教師は日本語教師としての経験から、学生に正しい日本語を身につけさせるだけではなく、語学教育を通して学生の人間形成を目標としていくことも大事だということを考えるようになった。こうした目標の再構築は、学生の資質や気質の変化と対応し、また自らの語学教育を人間教育という角度から問い直した結果だと思われる（康・森脇・坂本2008）。

II-3 第三コーホート J教師の事例（西安）

J 教師（男性・1979年生まれ・教師歴8年）のプロフィールを簡単に紹介しておく。

J 教師は、1998年に西安C大学日本語学科に入学し

た。C 大学で学部・修士課程を経て 2005 年に D 大学日本語学科の専任教員になった。在職しながら E 大学博士課程に進学し、歴史学の博士学位を取得した。現在は主に高学年（3, 4 年生）の日本概況や歴史分野の専門科目等を担当している。

歴史学を専門とする J 教師は、言語知識を道具にテーマを持って考える授業をしている。場合によって、日本語が二の次になることがある。その理由について、卒業研究を担当するとき、「何をしたいか」と聞いても「何も考えていない」と答える学生が多い。自分の授業を通して興味関心を持つ分野を見つけ、考える力を身につけるようにと意識しているという。

J 教師は学生時代の日本語専攻での授業は語学中心で音読重視の授業が多くて面白くなかった。教養科目で素晴らしい中国史の先生に出会ったことがきっかけで中国史を勉強しはじめたという。日本語学科でも歴史について勉強して比較研究をしようと思ったができなかったという思いから、語学専攻でも専門的な分野に触れるように、語学を通して課題意識を見つけるような授業をしたいという。

II-4 第三コーホート L 教師の事例（天津）

L 教師（男性・1979 年生まれ・教師歴 4 年）のプロフィールを簡単に紹介しておく。

L 教師は J 教師と同期で修士課程まで同級生だった。修士の学位を取得後の L 教師は 2005 年に天津 F 大学で日本語学科の専任教員として採用され、就職した。2008 年に日本の O 大学博士課程に進学し、4 年間かけて 2013 年 3 月に博士号を取得して F 大学に現場復帰した。

L 教師は授業中、発音、アクセントを丁寧に繰り返して訂正している。自分のきれいな日本語の発音や日本語学力は大学の日本人の先生のおかげだったという彼は、「中国にいてもきれいな日本語を身につけることができる」と自分の学習経験を授業にいかそうとしている。しかし 2007 年当時は、日本への留学経験がないことから日本文化については自信を持って触れることができな

い。また、毎日授業や授業の準備、宿題の添削等に追われ自分の時間が持てないとキャリアアップの面においても悩みを抱えていた（康・森脇・坂本 2008）。

色々な悩みを抱えつつ日本語教師を務める L 教師は、2008 年、念願の日本留学が実現できた。2013 年 3 月 O 大学で日本文学博士号を取得して現在 F 大学に戻って再び教壇に立つ。今後、この留学経験がどのように L 教師の授業に影響を与えていくのか今後を見守りたい。

III まとめ

本研究において明らかになった点は以下の通りである。

1. 研究仮説として、日本語教師の世代間の格差が地域間格差よりも大きいのではないかと考えて研究を進めてきた。天津と西安という大都市ながらも地理的、地勢的状况のかなり異なる地域の大学における日本語教師の授業スタイル形成の背景や舞台となる条件がかなり似通っていることが確認できた。また、世代によるその背景や舞台の変化も明らかになった。就職時を基準とした年代別集団（コーホート）のコーホート性が明らかになったといえよう。

具体的には以下の通りである。第一コーホートと第三コーホートの日本語教師としての経験の違いとして述べる。

一つには、日本語教師の養成をめぐる環境の変化である。第一コーホートの場合、日本語教育が大学教育として開始された時期と重なったため、即戦力として実践に参入することが求められた。一方、キャリアアップとしての高学歴の取得や日本への留学経験については、支援制度はあったものの個々に任された。それに対して第三コーホートでは、日本への留学や高学歴（博士）取得がキャリアアップには必須となっている。このことはとくに第三コーホートにとって、「教える」という仕事とキャリアアップのギャップという問題（「悩み」）を引き起こしている。

二つには、第一コーホートと第三コーホートでは、情報化による日本語へのアクセス環境が激変していること

である。教師モデルのない第一コーホートの教師たちは、とくにその変化を体験することになる。自分自身の学習経験をなんとか教育にいかしたいと考えて授業実践をおこなってきたが、ほぼゼロから自分の授業スタイルをつくりあげていつている。また、教える環境や学習者の変化を感じながら、実践を変革してきた。しかし、近年ますます変化は激しさをましている。例えば、教科書を一から教えることでいいのか、あるいはスタンダードの教科書が使用されなくなったときに、どう教えるのか、という問題とも対峙せざるを得ない。第三コーホートの教師たちは、恵まれた情報環境や日本との関係性をいかにしながら実践をつくることができているが、日本語が使われない環境における日本語教育において、基礎基本を確かに教える力も求められている。

三つ目は学習者の気質の急激な変化である。「パーリンホウ（80年代生まれ）」「ジューリンホウ（90年代生まれ）」という言葉がその問題の所在を示している。この問題は学習者との年の差が少ない第三、第四コーホートにおいても問題である。むしろ、わかりあえる、という思いが事態をさらに困難にすることもあるかと思われる。第一コーホートの教師は学生の気質の変化を常に感じてきた世代だが、最近の学生に対して人間教育の必要性を意識し始めていることは興味深い。

2. こうしたコーホート性の違いは、個別のライフヒストリーの舞台や条件として立ち現われている。個々の教師は、それぞれ自らが置かれた条件の中で、自らの特徴をいかした授業スタイルをつくりあげてきている。例えばJ教師は、自分の専門の歴史学（中国古代史）を日本語教育と同時に教える、というスタイル（2つの専門教育）を標榜し、実践している。授業スタイルは、コーホートの規定を受けながらも、個性的な様態において形づくられている。

到達点と課題

中国人日本語教師の力量形成の制度的な歴史や社会的文化的背景を浮き彫りにすることで、個々の日本語教師

のライフヒストリーへの理解やそれぞれの教師の時代的な課題や「悩み」の諸相を明らかにすることができた。第一コーホートの熟練教師の経験的な知恵（専門性）と若い教師に求められる高学歴化とのギャップが困難な問題を生起させるだろう。その際、日本語教師に求められる専門性とは何か、改めて問われている。

課題としては、第二コーホートの日本語教師たちの個別研究が進んでいない点が挙げられる。第一コーホートと第三コーホートの日本語教師の比較という研究ストラテジーで行ってきたが、いまだ空白地帯である。研究対象の事例数が少ないという問題も指摘されるかもしれない。しかし私たちは、事例数を少なくして一つ一つの事例を丁寧に掘り下げるという研究のストラテジーをとってきた。本稿で出された結論的な仮説は、ほぼ中国の他の地域における日本語教師をめぐる状況を示唆するものとなっていると考える。個別事例研究を重ねるといって、これからも妥当性と信頼性を高めていきたい。

註1：

本研究に用いたデータは、西安のA教師J教師は2人とも2009年と2012年、天津のD教師は2007年2回と2010年、L教師は2006年と2007年に実施した（授業見学を含めて）延べ1,340分間のデータをリーディングクエスチョンに基づいて整理したものである。

参考文献

- 1) 国際交流基金「日本語教育国別情報〔中国〕」ホームページ
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/china.html>
- 2) 篠崎摂子：国際交流基金北京事務所付日本語教育アドバイザー活動報告—海外事務所付日本語教育アドバイザーの役割について—。日本語国際センター紀要、第13号、141-146、2003。
- 3) 篠崎摂子、曹大峰：中国における非母語話者日本語教師教育の質的变化：「太平学校」と北京日本語

研究センターにおける実践から. 言語文化と日本語教育, 32 号, 105-108, 2006.

- 4) 竹中憲一: 中国における日本語教育. 早稲田大学社会科学研究所社研・研究シリーズ, 23 号, 49-79, 1988.
- 5) 篠崎摂子, 曹大峰: 中国における非母語話者日本語教師教育の展開―「大平学校」と北京日本学研究中心. 国際交流基金日本語教育紀要, 2 号, 135-140, 2006.
- 6) 木谷直之, 坪山由美子: 研修参加者に見る被母語話者日本語教師の特性: 1994-1998 年度の調査結果から. 国際交流基金日本語国際センター紀要, 10 号, 69-87, 2000.
- 7) 康鳳麗, 森脇健夫, 坂本勝信, 他: 日本語教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ―授業スタイルの形成と変容に焦点をあてて―. 鈴鹿医療科学大学紀要, No14, 71-77, 2007.
- 8) 康鳳麗, 森脇健夫, 坂本勝信: 中国人日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成―ライフヒストリー的アプローチを用いた事例研究を通して―. 鈴鹿医療科学大学紀要, No15, 19-28, 2008.
- 9) 康鳳麗, 森脇健夫, 坂本勝信: 日本語教師の授業

スタイル形成としての力量形成研究―ライフヒストリー的アプローチを用いて―. 鈴鹿医療科学大学紀要, No17, 39-48, 2010.

- 10) 森脇健夫, 康鳳麗, 坂本勝信, 他: 日本語教師の力量形成研究―線画の発達と「観」の形成―. 三重大学国際交流センター紀要, 第 6 号 (通巻第 13 号), 53-63, 2011.
- 11) 森脇健夫, 康鳳麗, 坂本勝信: 熟練日本語教師の力量内容とその形成―ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究―. 三重大学教育学部研究紀要, 第 63 巻, 267-273, 2012.
- 12) Patton: M.Q. Qualitative Evaluation and Research Methods.(2nd.Ed.) London, Thousand Oaks, New Delhi: Sage, 1990.
- 13) 山崎準二: 教師のライフコース研究. 創風社, 東京, 2002.
- 14) 藤原顕: 教師のライフヒストリー研究に関する方法論の検討. 福山市立大学教育学部研究紀要, vol.1, 79-94, 2013.
- 15) 秦明吾: 中国の大学における日本語教師養成の現在. 第 5 回日本語教育研究集会・講演, 2007.

A study of Life History of Chinese Japanese language teacher in China -focus on the difference of teaching style formation in the cohort-

Kang Feng LI¹⁾, Takeo MORIWAKI²⁾, Masanobu SAKAMOTO³⁾

1)Suzuka University of Medical Science, 2)Mie University, 3) Hamamatsu University

Key words: cohort, life history, Chinese Japanese teacher, life course of teacher, career enhancement

Abstract

We clarified the characteristics of Chinese Japanese teachers by finding employment cohorts. This report was written for the purpose of clarifying the scene and condition that individual life histories presented. Based on the institutional history of the Japanese language education in the Chinese higher education system and the social cultural background over Japanese language education, we separated four cohorts from the first cohort to the present from the 1980s. We examined the life history of 15 Japanese language teachers who worked for the university of Tianjin and Xi'an. We revealed that characteristics of generation cohort strongly influenced the individual life history in the Tianjin and Xi'an regions.

Regarding "teaching" in each generation, a similar problem (eg.,change of the information environment over the Japanese language and change of student as learner) exists in the common times, and "the trouble" is common again. The first big problems of Japanese language education in China include that a young Japanese language teacher must teach while considering career enhancement at the same time. We include a point as to how to succeed "to teach" about Japanese language education that an expert teacher cultivated.